
1 2 月 3 1 日

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12月31日

【Nコード】

N7976F

【作者名】

岡谷

【あらすじ】

謎の女と一年間暮らした男。しかし、その暮らしにも終わりがあった。

「寒いね・・・」

長い沈黙のあと彼女はそう口にした。

ボクの部屋には暖房器具がない。彼女が寒がるのは無理もない。

「うん、そうだね・・・」

ボクはそっけなくそう答えた。

結局、彼女のことは何もわからなかった。いや、それでも二つだけわかっていことがある。

それは彼女が僕の前に現れた日と僕の前から消える日だ。

彼女が来たのは今からちょうど一年前。今年の元旦の日だ。その日、彼女は突然ボクの前に現れた。なぜボクの前に現れたのかはわからない。それでも、その日から彼女との生活は始まった。

「本当にいなくなっちゃうの？」

「・・・うん」

彼女と生活をしていても彼女のことは何もわからなかった。どこから来たのか？目的は何なのか？そもそも何者なのか？ボクは彼女の名前すら知らない。しかし、ただ一つだけわかったことがあった。

それは彼女との生活が一年だけだということだ。何故かはわからないが彼女は今年の12月31日に消えるらしい。

「そっか・・・」

彼女のことは何もわからなかったけど今はそんなことはどうでも良かった。この1年間、彼女こそがボクのすべてだった。もしかしたら彼女は今年の精なのかもしれない。

時計を見るともう11時50分になるところだった。

「なんだかキミがあと十分後に消えてしまうなんて想像できないよ」

ボクは苦笑いしながらそう言った。

「わたしは消えないの。わたしに関する記憶があなたから消えてしまふの」

記憶が消えるなんてそのことのほうが想像出来なかった。だって彼女は今ボクの目の前にいるし、彼女と過ごしたこの1年間の記憶はまだ頭の中に鮮明に残っている。

そう、例えばいつか彼女と二人で行った遊園地。名前は確か・・・
・・・なんだっけ？

いや、これは単に度忘れしているだけだ。記憶がなくなっただけじゃない。

そうだ、他の思い出だってたくさんある。例えば・・・例えば・・・

・・・例えば・・・・・・・・

・・・そんな、思い出せない。

何故だ！彼女とはいろんな所に行ったじゃないか！何で何も出てこないんだ！

嘘だ！嘘だ！本当に記憶がなくなっているのか？よく考えろ。あんなに彼女との生活は楽しかったじゃないか！

・・・ん？彼女とは誰だ？ボクは今誰との思い出を思い出そうとしているんだ？思い出せない。そもそもボクに思い出なんてあるのか？

いや、無い。ボクに思い出なんてあるわけない。

だってボクはずっと一人ぼっちだったんだ。今だってボクのそばには誰もいない。

急に外が騒がしくなった。空も光っている。

お腹が空いてきた、何か食べよう。食べ物があったかな？

そう言えばこの目線、なんだか懐かしい気がする。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976f/>

12月31日

2011年1月20日01時53分発行